こころ

上水敬由

明治十年、西南戦争の最中、明治天皇は関西に滞在していた。『明治天皇紀』によれば、一月二十四日に「大和国及び京都行幸の途に就」き、二十八日の「五時二十分京都停車場に着御」したという。京都御所に入ったのは七時。

翌二十九日には「鹿児島私学校徒、陸軍省砲兵属廠の弾薬を略奪」して西南戦争が勃発する。

明治天皇は七月二十八日に至ってようやく「皇后と共に京都を発し、還幸の途に就」いた。すでに勝敗の帰趨が明らかになってのちのことである。

この間における明治天皇のこころを推測させるエピソードがふたつ。

ひとつは、一月四日の「御乗馬の概況」。

青山御所の皇太后に会いに行くため「午後一時三十分より乗馬」したのを皮切りに、それから十八日までほとんど連日「午後二時より日没に至るまで」練習した。

京都に行ってからも、公式行事にメドが付いたからか二月二十一日に御所内馬場で練習を始め、「四月中旬より七月五日に至るまでは連日」のごとく。

七月一日などは「暑熱九十四度に達し」とあるから摂氏三十四度以上の暑さにもめげなかったことになる。

その後脚気の症状が出たためにやむなく中断。東京に戻って療養ののち十月二十二日に

は練習を再開。ただ侍医が「極めて少時間の御乗馬ならば」と釘を刺したので、時間を午後三時から五時までとした。

制限時間を守らせようと（おそらく）周囲が「御相手奉仕者」を練習に加わらせたが、十二月十九日には彼に「外套着用」を許したという。明治天皇の我慢強さはともかく、つきあわざるを得ない「御相手奉仕者」はさぞかし寒かったことだろう。

ふたつめは、三月四日の「木戸孝允戦況及び将来の目的を具奏す」。

大阪で戦況に関する情報を得た木戸の報告を聞いた明治天皇が「西郷隆盛は側近に奉仕せしをもってその性格は天皇のつとに知食すところ、いまや賊魁となりて錦旗に抗するにあたりても、なおその心中を叡察あらせられ、深くこれを憐れみたまふ」。

これに対して「孝允、天皇の功臣を愛したまふの厚きを拝し感泣して退出」したとするが、すぐに続けて木戸が熊本鎮台の兵力増強を主張したと書いているのを見れば、まずは「お約束ごと」といったところか。

ただし木戸は五月二十六日に西南戦争の終結を見ることなく病死する。

これらのエピソードをもとに、明治天皇はお気に入りの西郷が京都にたどり着くのを叶わぬ夢と知りつつ待っていたのかもしれない、などと想像をたくましくすることも可能である。

蛇足だが、『明治天皇紀』成立の経緯については岩壁義光「明治天皇紀編纂と史料公開・保存」に詳しい。